

漱石

「虞美人草殺人事件」

斎藤 栄

中公文庫





中公文庫

そうせき くびじんそう さつじんじけん
漱石「虞美人草」殺人事件

定価はカバーに表示してあります。

1996年5月3日印刷

1996年5月18日発行

著者 さいとう さかえ
齋藤 栄

発行者 嶋中鵬二

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1996 CHUOKORON-SHA,INC. / Sakae Saito

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 本州製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202604-0 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

漱石「虞美人草」殺人事件

斎藤 栄



中央公論社

目次

前篇

7

後篇

171

解説

影山莊一

337

漱石「虞美人草」殺人事件

前 篇

この作品を愛するひとに贈る

第一章 小さな紙飛行機

第二章 泰山鳴動ネズミ一匹

第三章 豆腐田楽の店

第四章 救出の美少女

第五章 再び興味津々

第六章 漱石の世界へ

第一章 小さな紙飛行機

1

湘南新聞社は新聞社としては無論、そう大きな新聞社ではないが、鎌倉ではかなり知られていた。

新聞社のある場所は、いわゆる横須賀線の鎌倉駅で降りて、すぐ東口の左手を見ると、小町通りの入口が見える。そこを中程まで歩き、狭い道を段葛だんかずらのほうに進んだところにある。

川風あかりはその新聞社の記者だ。湘南新聞はやはり地方紙なので、なかなか優秀な男の人が来ない。そこでむしろ、社の主体は女性だった。そうした中で、あかり

は社会部の記者として活躍していた。特に、あかりは鎌倉署担当の、いわゆるサツ廻りの記者の仕事が中心だった。御多分にもれず、こうした小さな会社では、大会社で何人もの者がやっているような仕事を一括して一人で引き受けるようなことが多い。

入社して、三年目である。彼女の上役であるデスクの今泉功という男は、元はMという大きな新聞社に勤めていたが、上役と喧嘩をして左遷され、それで自分からそこを飛び出し、つてを頼って湘南新聞にやって来たというキャリアの人物だった。

目付きは鋭くて、何を考えているのかわからないようなところもあるが、しかし、女には甘かった。

あかりとしては、湘南新聞の内実をいろいろ知るために、この今泉と親しくするという作戦をとったが、今泉は何となくヌーボーとしていて、その本心を示してくれないようなところもあった。

「ねえ、デスク。今度の事件、私とても興味があるんです」と、あかりは今泉に言った。

今泉はデスクに文字通りデンと腰を下ろして、しきりに耳かきで耳掃除をしていた。「何だ、あの女子短大生の誘拐か」

と、低い声で言った。

「ええ、そうよ。あれは、地元であるうちが、できることなら、何か他社より早く情報をキャッチして、報道が解禁になったときに、大きな記事にしたいと思います」

「そうか。まあ、せいぜいやってくれ」

と、今泉はさして興味がないように言った。

この女子短大生の事件というのは、誘拐事件なので報道管制が敷かれ、報道協定のために新聞記事にすることはできないのだった。現在進行中の事件である。

それは、寿々木愛子という湘南女子短大の十九歳になる女の子が、どこかへ誘拐されてしまい、第一回の身代金要求を仄めかす電話がかかってきた事件である。

こうしたケースでは、報道協定に基づいて、各社とも新聞発表はできないが、その代わり、その裏で猛烈な取材合戦が行われるものである。ある意味では、新聞記者も探偵のような役割をするのだった。

「デスク、他の仕事をほっぽり出して、しばらく、あれに専念していいですか」と、あかりは聞いた。

「うん？」

と、今泉は顔を上げた。

「わたし、できるだけ、やってみたいんです。若い女の子が誘拐されて、もし殺されるようなことがあったら、こんなに酷いことってないでしょう？」

あかりは、デスクに詰め寄るような勢いで言った。

「ああ、わかったよ。君がそこで手柄を立てようという気持ちは立派だ。しかしね、うちの社は手がないんだよ。が、せいぜい他のものをやった残りの時間で、しっかりとやってもらいたいもんだ」

そう言って、右の耳を掃除していた今泉は、今度は左の耳に取りかかった。

満足にあかりのほうを見ようとはしない。

あかりはちよつと腹が立ったが、それでも一応デスクの了解を取りつけておくことが必要だと思っていたので、

「じゃ、いいんですね」

と、念を押した。

「が、おれのつけた条件の範囲以内でだな」

と、今泉は言った。

「わかりました。それじゃ、そういうことで」

「何だ。どこへ行くんだ？」

と、今泉は改めてじろっとあかりを見た。

「私の勘を頼りにやってみます」

「ははあ、勘を頼りにね。まあ、いいだろう。ああいう事件は、勘だけじゃだめなのさ。しかし、君は女だ。女の勘というものも、まあ、かなり当たることを知っているよ。やったらいい」

「ええ、やらせていただきますわ」

と、あかりは言って、編集部の部屋のドアを開け、外へ出た。

2

湘南新聞社の社屋を出ると、彼女は自分が、新聞記者よりも探偵になったような気持ちになっているのを自覚した。

（デスクだったらあんなことを言って、結局私に期待していないんじゃない。酷いわ。

いいわ、何とかして他の人に負けないで、先に犯人を暴くか、あるいは誘拐された愛子さんを助け出してみせるわ）

と、彼女は心の中で呟いていた。

小町通りをしばらく歩き、四つ角の角を曲がってしばらく横須賀線の線路のほうへ歩く。すると、まもなく古びた門があり、鎌倉では有名な別荘が見えてくる。そのあたりは古い大型の別荘が並んでいるところがあるのだ。さらに踏切を渡って西側に行くと、いくつかの有名な寺がある。そこから右手のほうは、あの有名な寿福寺などが、その堂宇を並べている場所だった。

あかりは、何故かこのあたりが駅に近いわりには静かな場所で、大町から誘拐された寿々木愛子の誘拐先のような気もしていた。本当にこれは、何の根拠もない。したがって、年末ジャンボ宝クジを買うような確率でしかないことを彼女は知っていた。しかし、片手にカメラを持ち、何かあったらこれで写真を撮ってやろうと思って歩いていた。

後で考えれば、このあかりの作戦というのは全くの素人考えであり、何の根拠もないばかりか、ほとんど一〇〇％無駄足に近い行動に過ぎなかったのである。けれども

突然、彼女の目の前に異様な白いものが見えてきた。それはヒラヒラと揺れながら、彼女の目の前に舞い降りるように飛んできたのである。

（あら、何かしら）

あかりはハツとして、それを見た。それは、小さな紙を折り畳んでつくった紙飛行機であった。（まあ）と思った。

（どこから飛んできたのかしら）

あかりは体を起こし、あたりを見回した。今まで俯き加減うつむで歩いていたので、その紙飛行機が飛んできた場所がわからなかったのである。そのあたりに、それを飛ばすような子供たちの姿はどこにもなかった。

道の左右には、二階建ての家が並んでいた。

（あら、あの家のどこから飛ばしてきたのかしら？ それとも屋上？）

そう思って、あかりはあたりを見回したが、そういう気配すらなかった。

（一体、どうしてこれが飛ぶの？）

とにかく飛んできた場所がわからないので、やむを得ず彼女はしゃがみ込み、その紙飛行機を拾い上げた。